

招待発表

『風流使者記』から『峽中紀行』へ

——荻生徂徠の紀行文学——

Ogyū Sorai's two travel chronicles *Fūryūshishaki* (1706)
and *Kyōchūkikō* (1710)

Olof G. Lidin*

In 1706 Ogyū Sorai went for his lord, Yanagisawa Yoshiyasu, to Kai Province. During the journey he wrote a travel chronicle, together with his companion Tanaka Shōgo, which was presented to Yanagisawa Yoshiyasu upon return to Edo. Four years later (1710) Ogyū Sorai revised this chronicle, made it shorter, and gave it the title *Kyōchūkikō*. The title of the first version was *Fūryūshishaki*.

The *Fūryūshishaki* and *Kyōchūkikō* were Ogyū Sorai's first literary works. Before 1706 we do not find much written by him. In a certain sense they were also his last literary works. Most of his later writings were in philosophy, political science, military matters, and other academic fields.

At 40 years of age Ogyū Sorai began his literary career by writing a travelogue in which he showed his rich personality as in no later academic work. Unfortunately, he never again tried

* Olof G. Lidin コペンハーゲン大学教授

his hand at this sort of literature.

In the study of Ogyū Sorai the *Fūryūshishaki* and the *Kyōchūhikō* are the natural starting-point. From there one can continue with his philosophical works and perhaps finish with his political work *Seidan*, which he wrote late in life.

これは宝永3年の話です。その10年前に(1696) 荻生徂徠(1666—1728)は柳沢吉保の藩のお抱えの儒学者—哲学者になり、すぐに柳沢吉保のお気に入りとなって、藩に10人以上いた儒学者の中でリーダーシップをとっていたようです。それは、おそらく、彼の哲学に関する知識のためではなく、むしろ彼の勝れた中国語の知識のためだったと思われる。

さらに前の宝永元年(1704)に柳沢吉保は川越の藩をかえられて、將軍綱吉から甲斐の国をもらいました。この時が柳沢吉保の権力が最高に達した時で、將軍綱吉の側用人として他の大名にはない影響を持っていました。甲斐の藩をもらって、彼の喜びはかぎりなく、自分は天命を受けた人だと思ったようです。なぜならば、柳沢家は甲斐の清和源氏と武田家、特に武田信玄の子孫だったので、甲斐をもらったのはたいへんな誇りで、武田信玄が彼を通じて生まれかわったような感じを持ったようです。

ですから、柳沢は自分の家と武田氏の歴史と旧事に関して興味を持ち、家の資料などを調べはじめました。荻生徂徠を初めとして、藩の儒学者は柳沢の藩史作成に取りかかり、藩の資料を集めて、整えていましたが、色々と資料に不備な点があったので、柳沢は満足できませんでした。ものを問える人も居なかったので、誰かが甲斐の国へ行き、史跡を調べなければなりません。柳沢自ら甲斐へ行く時間は無かったので、荻生徂徠と彼の同僚の田中省吾を送りました。藩の史跡だけではなく、甲府の城の修繕の仕事を調べ、甲府に近い躑躅崎に作りつつある柳沢家のお寺、霊台寺の実状を確認する任

命も受けました。

柳沢吉保の使命を受け、荻生徂徠と田中省吾は宝永3年(1706)甲斐に向け、出発しました。徂徠と省吾は駕籠にのり、総勢23人の行列でした。9月の7日(新暦で10月の13日)柳沢の神田橋の屋敷から出発して、新宿を通過して、甲州街道に出ました。江戸から甲府への旅は普通3日かかりました。けれども徂徠らは4日目の朝甲府につきました。最初の晩は八王子で泊まり、2日目が猿橋、3日目が石和で、4日目の朝に甲府に着きました。途中、2日目は500メートルの小仏峠をのぼり、3日目は1100メートルの篠籠峠を越えました。八王子から勝沼までの甲州街道はでこぼこで、谷の下から山の上へ、山の上からまた谷の下へという道でした。徂徠の言葉で「巖徑崎嶇。在亂山萬重中」。私の英語の翻訳では“The rocky path ran rough and steep, up and down through a myriad dangerous passages of wild and rugged terrain.”今日の高速道路はもっと平らです。

石和の駅は甲府に近いので、行こうと思えば、もちろん3日目の晩に甲府につく事が出来ましたが、到着直後に公式な訪問をする必要があったため、彼等は次の朝がふさわしいと思いました。というわけで、4日目の朝甲府につき、早速藩の邦大夫を訪問し、藩主のメッセージを渡しました。そのすぐ後城を見に行きました。城では天守台に上りましたが、徂徠がめまいに苦しむほど高い所でした。でも、そこからは甲斐の山々のパノラマが好く見え、南に富士山が天までそびえていました。景色はもちろん、天気も好い日でありました。

次の日(9月の11日、新暦で10月の17日)一行は甲府に残って、朝のうちに武田信玄の躰躰崎の城を見に行きました。この城は天正10年(1582)織田信長によって焼かれたので、徂徠の訪問の時には、廃墟だけ残っていました——大体今日と同様だったと思われます。城は、あまり印象的ではなく、「極痺矣」と徂徠は思いました。でも、それに続けて、信玄については「可謂能以國為城者矣」と感心して書いています。武田信玄の城を見た後、そこから

20分ぐらい東に向かい、躑躅崎あたりに建設中だった柳沢家の寿蔵の寺に行きました。そこで持参した柳沢吉保自作の寿蔵の碑文を手を持って、あたりの景色と比べながら読み上げました。テキストに書かれていた事情は全部正しく、みんなはすっかり感心して、藩主は「神也」、「能見千里外也」と感嘆しました。ところが、このお寺も碑文も実際に用いられませんでした。柳沢吉保のお墓は恵林寺で、寿蔵の碑文も別のもので短くて簡単です。

同じ晩に公式な晩餐が催されました。晩餐の折にもう一度藩主の碑文が読まれ、「神也」と一同嗟嘆しました。風流使者記の2つの巻にこの晩に関する事が述べてあります。しかし、峽中紀行には2行だけ「帰て邦大夫と明日西に行く事を図る。寐れば則ち鶏鳴けり」とだけあります。ともかく、長く賑やかな晩でした。

次の2日間は柳沢家のルーツを調べに甲斐の西部へ出発しました。最初の日、9月の13日（10月の18日）は、韭崎を通って柳沢家の祖先のお寺、常光寺を訪ね、2日目は柳沢家の祖先の村、柳沢村に行きました。常光寺も柳沢村の甲府の西で、甲州街道の南にあります。

ところで、柳沢家の柳沢という名前はわずかに3代前から始まりました。柳沢吉保の祖父、信俊が柳沢系統の初代で、それ以前の祖先は青木の姓を名乗り、甲斐の西部を治めていた武田家の一族でした。風流使者記には、全部の祖先について詳細に述べてありますが、峽中紀行には、ほとんど述べてありません。ですから、峽中紀行を理解するためには風流使者記が必要です。

常光寺で青木の祖先について語られ、柳沢村を訪ねた時には、初代の信俊の事が話されました。信俊の当時の事はまだ色々と記憶されていました。

甲斐の西部での最後の目的地は山の上の要塞“餓鬼が噬”でした。柳沢村から2-3里離れていただけで、山の頂にあったので、道が険しく、上るのにたいへん骨が折れました。餓鬼が噬の要塞はずっと以前から戦国時代に、織田信長の軍隊が進入してきた時にも、祖先が立てこもった要塞でありました。武田勝頼が敗北して、天目山で切腹した時（1582）ですが、柳沢吉保の

祖父の信俊は危険が迫って、そこに隠れました。上りも下りも徂徠の描写は、生き生きとしています。けれども、徂徠は要塞まで達しませんでした。「命のためなるかな」と徂徠は哲学的な溜息をもらしています。遠くから要塞を見る事ができただけでした。山を下って、もう一度柳沢村を通り、同じ晩遅く、甲府の旅館に戻りました。

次の日、9月の14日に甲府で休息し、町の見物をしたり、柳沢藩の邦大夫に会った後、翌日の帰りの準備をしました。

雨の中、9月の15日に帰りの旅が始まりました。でも、直接甲州街道を通って帰ったのではありませんでした。甲州街道より少々北の道を取って、この日の最初の目的地、恵林寺へ向かいました。これは夢窓国師が作った(1330)臨済宗の有名なお寺で、後に武田信玄の寺になり、今日でも信玄と柳沢吉保の遺品の多い所です。お寺の一番有名な宝物は武田信玄の不動明王です。徂徠はもちろん(1706)、私も(1975)この彫刻を見ました。

恵林寺から、塩山にあるもう1つの臨済宗のお寺、向嶽寺を見に行きました。当時向嶽寺は恵林寺の様に大きな寺でした。しかし、今日では、残念ながら衰えて恵林寺のような立派なお寺ではありません。

塩山から勝沼に向い——まだ雨が降っていましたが——夜勝沼に着き、そこで泊まりました。

次の日、9月の16日にもう一度甲州街道を離れて、天目山を見に行きました。これも徂徠の歴史に対する興味からでした。この天目山にある田野村で、武田勝頼は息子と若い妻と一緒に切腹して自害しました。彼らの死で武田氏28代の歴史は幕を閉じました。後に徳川家康は田野に景德院というお寺を造り、武田勝頼の思い出の寺としました。今日も同じところに景德院が見られます。勝頼の最後の日について徂徠は詳しく触れています。そして景德院から天目山のもっと上の棲雲寺に行きました。この棲雲寺も武田氏の歴史の中で重要な位置を占めるお寺です。天目山の景色はとても珍しく美しいところです。徂徠はもっとこの景色を見たかったのですが、お坊さんは反対しまし

た。ですから、降りる時、徂徠は坊主がいない景色の方が好いと結論しています。

この夜は甲州街道の駅、鶴瀬で泊り、翌日、旅行の目的をすべて果たして、江戸に直行しました。篠籠を通過して、17日は上野原まで行きました。上野原で泊り、次の18日小仏峠を通過して武蔵の府中まで行きました。

19日（新暦で10月の25日）やっと神田橋にある柳沢の屋敷に戻って、藩主の柳沢吉保に旅行の報告をしました。柳沢はこの報告をたいへん喜び、徂徠と省吾に漢詩を一首与え、その詩の中でかれらを「風流使者」と呼びました。

この12日間の旅行は、それ自体、そんなに珍しいものではありませんでした。御承知の様に徳川時代に旅行した人はたいへん多かったのです。でも荻生徂徠は生涯のうちほとんど江戸から離れたことがありませんでした。おそらく成人になってした旅行ではこの甲州への旅がかれの唯一のものでした。その上に、この旅行中徂徠は田中省吾と一緒に紀行を書きました。紀行の名前は最初「物茂卿・田省吾甲州に使用する記」でした。物茂卿は徂徠の中国風の名前で、田は同じように田中の中国風の名前でした。この紀行のオリジナルは荻生家（荻生8世・荻生敬一氏の家）に残っています。江戸へ帰った後で、タイトルが変えられ、風流使者記になりました。新しいタイトルは、もちろん、柳沢吉保の漢詩に使われた「風流使者」という言葉を用いたものです。この紀行は全部で21巻あり、甲斐への旅の、詳細で幅の広い報告でした。柳沢吉保のために書かれたレポートだったので、旅行中のすべての体験、歴史的な事実がひとつひとつ細かく述べられています。それに加えて、旅行中に作った徂徠と省吾の300の漢詩も入っています。

風流使者記には日付がありませんが、おそらく、旅行のすぐ後に書き終わられ、柳沢吉保に渡されたのだと思います。つまり、宝永のことです（1706）。ところが4年後の宝永7年（1710）に徂徠は突然この風流使者記を書き直しました。なぜでしょう？何か政治的な理由があったと思われます。1年前に将軍綱吉がなくなり、そのすぐ後にかれの側用人、柳沢吉保が退任

しました。その結果、徂徠も柳沢家の藩の屋敷（神田橋）から江戸の下町の茅場町へ引っ越して、新たに学者としての生活を始めました。でも、まだ柳沢家の儒者として仕えていました。この様な事情の下で4年前に書いた風流使者記の色々な部分が危険に思われたのではないのでしょうか？風流使者記は柳沢吉保の権力が最高の時に書かれた紀行でしたから、柳沢とか、彼の祖先の清和源氏とか、特に武田信玄が尊ばれています。風流使者記は柳沢が権力に陶醉していた時に執筆されたので、4年後の時局で、書き直して峽中紀行を書いたと思われます。おそらく他の理由もあったでしょう。茅場町で漢文の練習として峽中紀行を書いたのかもしれませんが。1709年から徂徠の古文辞学の時代が始まっているので、峽中紀行は古文辞で書かれた初めての作品ではないかと思われます。

理由は何であっても、峽中紀行は風流使者記と色々な面で違います。まず、峽中紀行の方がはるかに短い。風流使者記は21巻ですが峽中紀行は3巻だけです。紀行文の内容はもちろん同じですけれども、峽中紀行では集中的に表現されていて、古文辞に近く、ソフィストケートされた純粋な中国語で書かれ、スタイルもコンパクトです。そのために風流使者記より読みにくくなりました。ですから、峽中紀行を読む時には、まず風流使者記を読むと良いと思います。風流使者記は描写が詳しく、中国語も割合に簡単で、読み易いものです。今日の読者にとっては、峽中紀行を風流使者記と並べて読んでいくことが一番好い方法だと思います。

峽中紀行には漢詩は載せてありません。全部で300の漢詩は省いてあります。そのため、峽中紀行の方が中国的です。詩があるために、風流使者記は日本的で伊勢物語などに似ています。

ところで、この2つの紀行の中での徂徠はどんな風だったのでしょうか？甲斐に行った時、徂徠は40才でまだ若く、元気旺盛でした。風流使者記では楽しくない時間はすこしもなく、笑いとユーモアに富んでいます。

获生徂徠と田中省吾はセルバンテスのドンキホーテとサンチョパンサや十

返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』の弥次喜多のようなコンビです。さまざまな点でふたりは対照的でした。徂徠は儒者でしたが省吾は禅宗信者だったと思われまゝ。徂徠は省吾の非合理的な傾向を指摘して、みんなでからかいました。でも、徂徠と省吾が本当の好い友達であったことは読者にすぐ分かります。前に言いましたように、風流使者記は全編を通じて陽気です。陰気な表現はありません。

ところが、峽中紀行では大きな変化が現われました。内容はもちろん同じですが、時々徂徠の新しい顔が見受けられます。風流使者記にはなかった悲しみも表現されています。あるところでは藩の学者の辛い生活について語られており、檻に入れられた動物のような生活だと言っています。また別のところでは人間の悲しさと学者の辛さに触れて、「甚矣人之艱于生也」とも言っています。この言葉は風流使者記には見られません。徂徠が変わったことをよく現わしていると思われまゝ。

そのほかに読者はふたつの紀行で徂徠についてどんな印象を受けるでしょうか？

まず、徂徠の豊かなパーソナリティー・人間性があげられます。かれの興味はあらゆるものに向かっていた。その想像力は何事にも飛んでいって、全体的で、普遍的人間、ホモ・ユニベルサリスでした。どこへ行っても、山を描写し、橋の大きさを測り、ノートしています。ひとつひとつの発見をすべて記録して、後で紀行に入れました。訪ねたお寺もみんな詳細に記述しております。そして、さまざまな経験は漢詩の中でも語られています。駕籠の旅でしたが筆で書く事ができました。これは私の想像ですが、同行した3人の秘書が毎晩その日の記録を書いておいたようです。ですから、江戸に帰ってから、徂徠と省吾は紀行の最終稿だけを書きました。

徂徠の歴史に対する興味は特別でした。各々の場所の歴史を調べ、昔の事情を全部記録しています。甲斐の歴史、特に清和源氏の武田氏の歴史は詳細にわたっています。もちろん武田信玄はこの甲斐の国の英雄で、もうひとり

の英雄、柳沢吉保はかれの子孫でした。それで、甲斐は日本だけではなく、地球の真中の国だと徂徠は力を入れていっています。

ところで、この甲斐についての記述は風流使者記だけにあって、峽中紀行には見られません。峽中紀行では、前にも触れた通り甲斐の国の歴史とか、武田信玄、特に柳沢吉保の英雄としての資格についてとかは、ほとんど全部が省かれています。風流使者記では富士山はこの甲斐と武田信玄と柳沢吉保のシンボルでした。富士山は甲斐の山で、東の海の蓬萊、仙人が住んでいるところです。つまり、甲斐と日本は東の蓬萊で、世界の中心の国と見られています。もちろん、このような世界観は後の峽中紀行には見られません。

徂徠は旅の途中で会った人々にも深い関心を示しました。貧しい人々には同情しています。なぜでしょう？彼自身、子供の頃の田舎での貧しい生活を忘れていませんでした。かれの13才から25才までの上総における流人の子時代のことを、風流使者記でも峽中紀行でも述べています。徂徠は庶民の貧乏の事情を好く知っていて、容易に理解し同情することが出来ました。そして、江戸の人々が田舎の生活を知らないのを、悼むべきことだと言っています。

かれも江戸に長い間住んでいるうちに、昔の貧乏を忘れたとっております。けれども、徂徠は決して忘れたことはありませんでした。その証拠に、この紀行でも後の作品でも、たとえば年とった時に書いた「政談」の中でも、上総での体験について述べています。

40才で甲斐に行った徂徠は、まだ日本の思想界では若い学者でした。10年間柳沢藩の儒者として勤めていましたが、まだ哲学者としての名前は立てていませんでした。4年後、風流使者記を書き直して峽中紀行をまとめた頃から、文学者として茅場町で評判を上げ始めましたが、44才の時もまだ哲学者として有名ではありませんでした。高名を謳われはじめたのはもっと後の50才以降のことです。実際、徂徠の儒学者としての高い地位は最後の10年に築かれました。

さて、風流使者記に現われた哲学とはどんな哲学でしょうか？それは、も

もちろん、古文辞学でも古学でもありませんでした。40才の徂徠は、大体において、正統の朱子学派のひとりでした。まだ自分の独自の哲学は持っていませんでした。風流使者記の中で、2度、かれは自分を中国の唐代文学の専門家だといっています。これは事実に近いようです。その頃の徂徠はたしかに中国語の専門家でした。哲学者というよりは、むしろ文学者、漢文のエキスパートでした。

その当時の徂徠の考え方と *Weltanschauung*・世界観は、実際、哲学と宗教と神話がミックスされた面白いものでした。そして、中国と日本の思想が半々になっていました。日本の部分は、前にも触れたように、ナショナリストの日本主義でした。富士山はそのナショナリズムのシンボルで、非合理的な感情に含まれている部分です。ところが、この日本主義は中国からの思想に混ざっていました。儒者としてかれはもちろん孔子と孟子と朱子などの思想を詳細に勉強していました。生活を立てるために、柳沢藩に仕える前にも、仕えていた間も、その後も、ずっと中国の思想を、中国語と一緒に教えていました。いわば、これは彼の哲学の合理的な部分と思われます。かれの右の足は自分の国、日本に立ち、左の足は中国に立っていました。けれども、40才の徂徠の考えはもっと複雑でした。老子の道教からも影響を受けていましたが、それも宗教的・非合理的な部分でありました。仏教への関心は少なかったようですが、仏教に反対する表現はありません。彼の思想は複雑でしたけれども、矛盾はなかったようです。すべてが色彩の豊かなモザイクになっていて、非常に興味深いものになっています。

これらのふたつの紀行の魅力は、徂徠の幅広く底の深い世界観から来ていて、それはかれが合理的な要素と非合理的な要素を混ぜ合わせることが出来たからでした。徂徠の40才の世界は生きている全体でした。今日の唯物論的な世界ではありませんでした。幅の広い天と地と神の現実に動いていました。漢詩の中にも同じような世界が生き生きと描かれています。

ところで、風流使者記から峽中紀行へ移る中で何か思想上の変化や発展が

あったでしょうか。ほとんどありませんでした。峽中紀行には省略が多く、より合理的より中国的に見えます。でも、その世界観は、驚くほど風流使者記のそれと似かよっています。そして、非合理の要素がすこしだけ減少しています。変化は古文辞学の文学とスタイルとして現われました。ただし、事情が一変するのは7年後、かれの古学が発展すると同時に50才以降の執筆活動が始まってからです。

40才の時の風流使者記と44才の時の峽中紀行は、実際、徂徠自身のようにオリジナルなものでした。前に見たように、これは単なる旅行記ではありません。ふたつの紀行は両方とも歴史、哲学、宗教、風俗、お寺の伝説などで一杯です。その上にユーモアと楽しさにもあふれていて、2人の親友がした旅行の生き生きとした記録になっています。非合理的な要素と合理的な描写のバランスもよく描かれています。しかし、風流使者記にはもうひとつ別の次元がありました。各々の経験が漢詩に書かれていることです。そのため、今日では風流使者記の方がより面白く思われます。

ふたつの紀行は、両方とも、徂徠の文学の仕事の初めでした。私もこの研究を始めた時その事実を知りませんでした。実際、宝永4年まで(1706)徂徠の執筆になるものはほとんどありません。すこし手紙があり、すこし漢詩と歌があり、辞書の仕事もすこしありました。けれども、風流使者記まで本格的な文学の仕事はありませんでした。その次の作品が峽中紀行です。この2つの作品の間に知られた作品はひとつもありません。ところが風流使者記と峽中紀行は徂徠の最初の文学的な作品だったというだけでなく、ある面で、かれの最後の文学の作品でもありました。かれのその後の執筆は、大体において、哲学と社会学などの分野に集中しています。徂徠は最初に紀行二部作を書き、自分の豊かな人間性を現わして、文学者としての才能を見せました。しかし、残念ながら、この種の文学はそれ以後書かれませんでした。

風流使者記と峽中紀行は、徂徠研究においては出発点を占めるべき作品だといえると思います。50才の徂徠の学問が発展・発達していく原点をそこに

求めることが出来るはずです。

また、風流使者記と峽中紀行は、今まであまり研究されていない作品ですが、江戸時代紀行文学としてもっと評価されるべきだと思います。

討議要旨

西勝氏より、荻生徂徠に於ける文学と思想（哲学）とのボーダーラインをどこに引くかとの質問に対し、発表者より簡単に答えれば「文学」の定義の問題で、中国で「文学」といえば、哲学、エッセー、漢詩、小説等みな文学となり、ヨーロッパでは小説だけとなるとの発言があった。